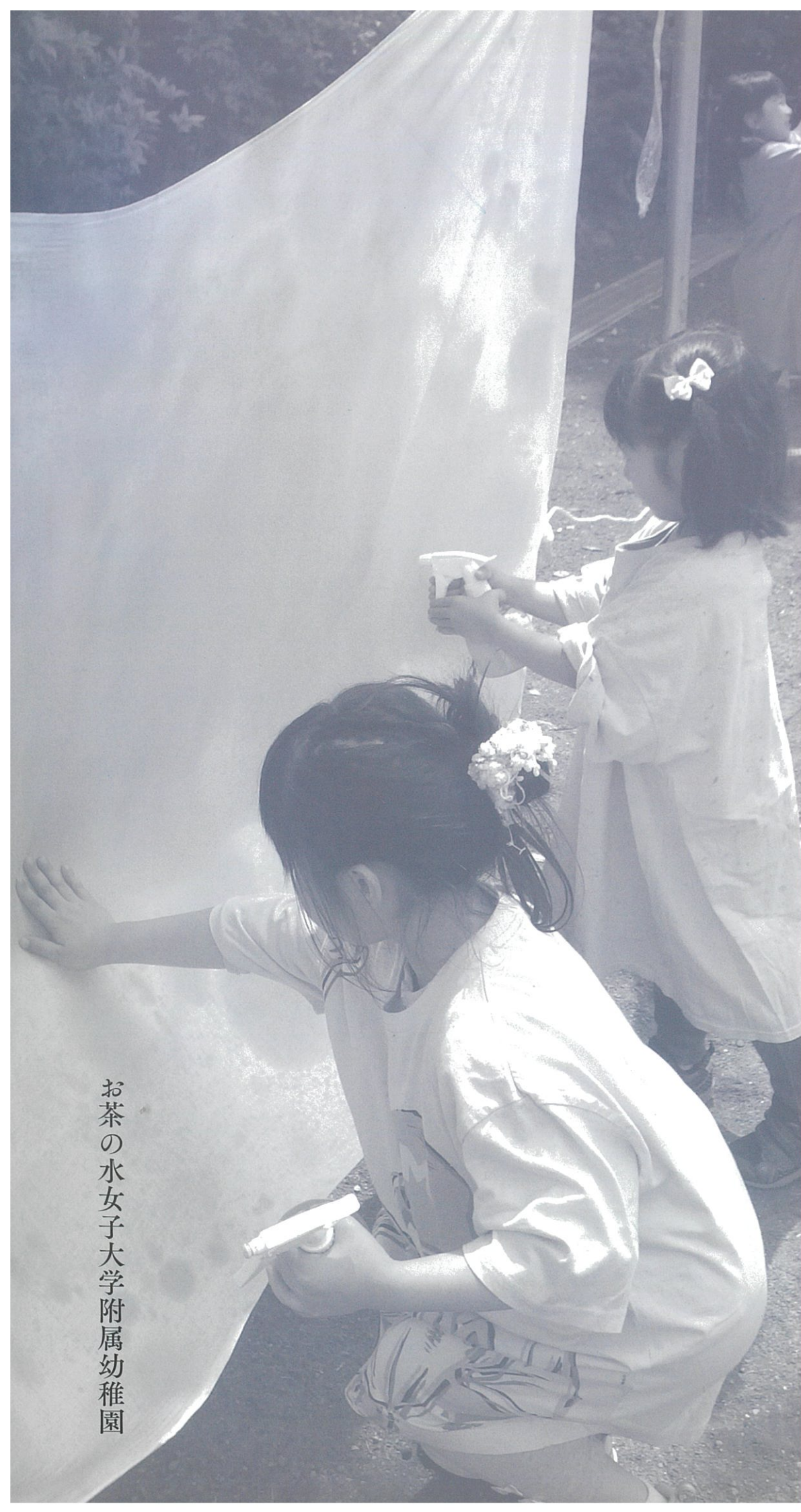


平成28・29年度 研究紀要

子どもの内にある感受性を探る

お茶の水女子大学附属幼稚園



はじめに

私達の心の内にあるさまざまな力、その一つに「感受性」——「感じ受けとめる力」があります。それは、外界にある、「ひと」「もの」「こと」のすべてに向けられます。何をどこまで、どのように感じ受けとめるかは、人によって違うでしょうし、とりわけ乳幼児期は、発達段階によっても異なります。しかし、他の心の力、例えば「想像力」や「共感性」を発揮する前提には、必ず「感受性」があるといつてよいでしょう。

保育の場では、子どもの心のそうした営みを、保育者が感受することを求められます。ことばを通じたコミュニケーションは重要な手がかりになりますが、子どもたちのことばによる表現は、まだまだ未熟です。また、大事だからこそことばにはしない、できないという場面も、私達大人と同様にあることでしょう。それゆえ保育者は、ことば以外にも、子どもの表情、身振り、行為など、さまざまな情報を受容し、それらを総合して、子どもの心の「いま」を捉えようと努めるのです。

お茶の水女子大学附属幼稚園では、平成28・29年度の園内研究のテーマを「子どもの内にある感受性を探る」と定め、研究に取り組んできました。それぞれの保育者が持ち寄った事例をもとに、子どもたちの心が何に向けられ、どのように動いているのかを共同的に探究してきました。一つの事例をめぐっても多様な解釈があり、つねに一つの正解が導かれるわけではありません。しかし、各保育者の解釈を重ね、位置づけていく過程で、子どもの心の多面的で複雑なありようが、少しずつ立体的な像として結ばれていくのです。

子どもの心の内にある「感受性」という捉えがたいものに、少しでも近づき、理解しようとしてきた過程——それは、実は保育者自身の「感受性」が試される過程でもありました。保育者の眼は、子どもを取り巻く「ひと」「もの」「こと」に向けられ、その向こうに子どもの心、そして「感受性」を見通そうとしてきました。しかし、そうした保育者のまなざしは、子どもを経由して、自身の心の内にある「感受性」にふたたび回帰していきました。



子どもたちもまた、成長の過程で、そうしたまなざしの回帰を経験しているのではないのでしょうか。子どもたちにとって、見たもの、聞いたことば、体感した空気感など、発達初期にはバラバラな情報であったものが、しだいに見えない糸でつながっていることや、より大きな意味のまとまりを構成していることに気付いていきます。さらに、その大きな意味のまとまりのなかに自身がいるのだと気付くことが、まなざしの回帰の経験であり、そこに、子どもの確かな育ちの軌跡をみることができるようになります。

本研究紀要が、幼児教育の研究と実践に携わる、すべての方たちの関心をつなぎ、広げていく一助になれば幸いです。

園長 藤崎 宏子

子どもの内にある感受性を探る

目次

はじめに

第1章 研究の経緯

1. 研究テーマの設定 ～子どもの内にある感受性を探る～ …… 6
2. 研究の進め方 …… 6
 - (1) 事例をもとに語り合う
 - (2) 考察の観点を見出す

第2章 実践事例 その1

1. 実践事例 …… 12
 - (1) 3歳児 ぼくの幼稚園?
エプロン、しない
コートかけとゾウのぬいぐるみ
 - (2) 4歳児 ひとつならいいよ
電車ときどき猫
音楽会
 - (3) 5歳児 カレーが作りたい
かかしの存在
「ドッジボール、やりたい」
一歩をふみだすとき
2. 本章の考察・まとめ …… 19

第3章 実践事例 その2

1. 実践事例 …… 22
 - (1) 隠れる ～A児の思いと私の関わりのズレ～
 - (2) 遊びの中で表し始める ～迷いながら関わる私～
 - (3) 自ら少しずつ動き出す ～A児の思いが見えてくる～
 - (4) A児を取り巻くひと・もの・こと
2. 本章の考察・まとめ …… 26

第4章 研究のまとめ

- 感受性と「ひと」「もの」「こと」との関わり …… 28
- 子どもの心もちと教師の感受性 …… 29
- 非認知的な能力(社会情動的スキル)と子どもの感受性 …… 30

引用・参考文献 …… 31

資料 講演の記録 …… 32

おわりに

おわりに

「子どもの内にある感受性を探る」という研究テーマで、平成28・29年度の2年間積み上げてきた成果をやっとお届けすることができました。今回の研究紀要も、少しでも多くの幼児教育に携わる方、あるいは関心を寄せてくださる方に手に取って、読んでいただけたらと願いつつ、研究の表し方を模索しながら作成しました。2年間にまたがる本研究は、前年度の同僚からバトンを受け取って研究をまとめることにもなりました。ここに載せた事例は、数は多くありませんが、園内研究会を中心に事例を巡る語り合い、対話を重ねたものばかりです。教師間で互いの発想に驚き、新しい気付きに心が動き、研究の取り組みは、まさに教師一人ひとりが自分の感受性と向き合う過程となりました。感受性という目には見えないものを探るという研究では、子ども・教師双方のたくさんの迷いや葛藤が、事例を通して浮き彫りになりました。さらに研究紀要としてまとめていくにあたり、伝える言葉、伝わる表現を探る困難さにも突き当たり、教員はそれぞれに産みの苦しみに耐えながら、感じ考え、それを表すことと向き合ってきました。一人ひとりの教師の言葉を尊重しながらも、感覚的な表現だけに留まっていたのでは、相手に伝わっていかないのではと悩みもしました。汲み取った子どもの心もちや教師の思いを伝える言葉をもつということは、引き続きの課題になりそうです。ただ、そうした苦勞以上に、子どもの心もちを前よりわかったと思えると、一人ひとりの子どもたちが紡いでいる物語に引き込まれ、子どもの日々の遊びや生活の深さや面白さをたくさん感じ取ることができました。日常生活で自分達の変化を感じることもありました。本を読んだり大学の講義に参加したりする中で、自分達の気付きのセンサーが敏感に働くようになったと感じたのです。テレビを見ていても、CMの登場人物の言葉が説得力をもって心に響いてくる、講義に出てみると、語られる内容に共感したり感心したりするといった、「面白い!楽しい!」と心が動くことが増えました。わかりたい、わかった気がする、まだまだわからない、という子ども理解の循環を、今後も引き続き面白がりながら深めていかれたらと思っています。

この研究紀要が、子どもの心もちに寄り添い、子ども理解を深めたいと願う多くの方の一助となり、いろいろな方との対話を生むきっかけになればとても嬉しいと思います。

最後になりましたが、研究を導きご指導いただきました、東京大学の遠藤利彦先生、菅原ますみ先生、浜口順子先生をはじめとするお茶の水女子大学の先生方に改めてお礼を申し上げたいと思います。公開保



育研究会にご参加いただいた先生方に、貴重なご意見をいただくこともできました。また、子どもを巡って感じ考える時間を共有してきた、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園の先生方、子どもたちの生活をいつも支えてくれる保護者の方、そして日々の生活の主役である子どもたちに心から感謝したいと思います。

副園長 上坂元 絵里



研究同人

平成28年度

園長	藤崎 宏子
副園長	伊集院 理子
教諭	伊藤 綾子
教諭	上坂元 絵里
教諭	佐藤 寛子
教諭	杉浦 真紀子
教諭	高橋 陽子
教諭	灰谷 知子
教諭	佐々木 麻美 (写真)
養護教諭	渡邊 満美
非常勤講師	栗原 妙佳
非常勤講師	田中 かさね
非常勤講師	戸田 実穂

平成29年度

園長	藤崎 宏子
副園長	上坂元 絵里
教諭	佐々木 麻美
教諭	佐藤 寛子
教諭	杉浦 真紀子
教諭	高橋 陽子
教諭	田中 かさね
教諭	灰谷 知子
教諭	栗原 妙佳 (写真)
養護教諭	渡邊 満美
非常勤講師	木村 萌
非常勤講師	戸田 実穂
非常勤講師	森本 亜子

平成28・29年度

お茶の水女子大学附属幼稚園研究紀要

子どもの内にある感受性を探る

平成30年3月31日

発行 お茶の水女子大学附属幼稚園
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL 03-5978-5881
FAX 03-5978-5882

印刷 有限会社サンプロセス